column

図書館の外へ

町北朋洋

私は今、米国で労働経済学の研究を行う機会に恵まれています。渡米後は、現代米国のビジネス文化を支える核心を簡潔に表したいと考えてきました。本稿では、スタンフォード大学図書館を利用するなかで新たに発見した三つの機能を紹介することで、大学図書館からみえる現代米国の姿を一言で捉まえます。どういう一文であれば、「そう言われれば、そんな気もする」と多くの人に納得してもらえるでしょうか。

●PDFで相互貸借

渡米後、当地では購読していない学術誌の論文が必要になり、研究室のコンピュータから図書館に「ログイン」して図書館間の相互貸借手続きを行いました。一週間ほど待てば、他所の大学図書館から印刷物が郵送されるはずだから、その時に受取りに行こうと思っていましたが、全く意外なことが起きました。翌日、PDFファイルで当該論文が私の電子メイルアドレス宛に転送されたのです。実は他所が学術誌の電子版を購読していれば、PDFファイルをやりとりすることで相互貸借とする、というルールでした。他所での印刷、郵送、そして当地の図書館による取置き、到着連絡の手間を一度に省きます。図書館ネットワーク全体で大きな費用削減となります。地味ですが、図書館員の時間の使い方を大いに変え、専門を磨く時間の確保にもつながるでしょう。利用者が大学図書館をより身近に感じ、学外の図書館ネットワーク網に対する信頼をより高める仕組みでもあります。

●寄贈の呼びかけ

在外研究を終えるにあたり、大量の書籍をどうするか、どう運ぶかを考えなければなりません。良い方法があるよ、と当地の先生が教えて下さいました。解決法は簡単で、状態の良い本を選び、図書館に寄贈するのです。図書館への寄付金と同様に寄贈者の名前が記され、寄贈本は永く残ります。スタンフォード大学には大小合わせて二四の図書館があり、そのひとつ、東アジア図書館に日本から持ち込んだ専門書が収められれば、未来の日本・アジア研究者が執筆する博士論文の参考図書になるかもしれず、寄贈のし甲斐があります。寄付金も含めて図書の寄贈を大々的に呼びかけることは、図書館にとり、二つの意義があるように思います。ひとつは別の資料購入に予算を配分できること。もうひとつは専門家がどの本を重要だと思ってきたか、図書館自身が情報を得られることです。

●展示で付加価値を

図書館は本をお供えするだけの場所ではありません。企画展示が練られていれば、蔵書同士が訪問者の頭のなかで化学反応を起こし、知識生産につながります。「アート・ミーツ・テクノロジー」と題された企画展示では、大学内外の教員が発明してきた、電子楽器、地図、風刺画、撮影法などが、大学所蔵の著作、私信、ノートと共に紹介されています。クレジットを見ると、細かい専門に分かれた数多くの図書館員が関わっており、準備に手間をかけたことが窺えます。こうして書庫に眠っている資料を時々出してきて、並べて比較し、先人の業績の意味を再定義することで、世の中について鮮やかな視点を図書館が示せるのでしょう。お互い距離のある異分野の蔵書同士を図書館が束ねることで、学生、専門家に関わらず、ひとりでは普段見過ごしてしまいがちなものに目を留める貴重な機会が生まれます。

本稿では大学図書館での相互貸借、本の寄贈、企画展示の三つの機能を紹介し、図書館が知識生産の重要な役割を果たすことを強調しました。三つに共通する特徴は、図書館が外を向いていることです。外を向く誘因は、*You've got to wow them!*（皆をアッと言わせることが大事なんだ［参考文献①］）という一言にあると思います。この一文が図書館を含め社会の隅々まで染み渡り、人々を限定しているのが現代米国だと感じています。

（まちきた　ともひろ／アジア経済研究所　海外派遣員）

《参考文献》

①『NHKラジオ　入門ビジネス英語』二〇一〇年一〇月号　NHK出版。